

のまわりは、きれいに草が取つてありました。与右衛門さんは、さっそく、お墓の前にひざまづきました。

与右衛門「お父さん、遅くなりました。九歳でお別れをしてから、一度も会うことなく過ぎました私の親不孝を、どうかお許しく下さい。」

与右衛門さんは、お父さんのお墓に手を合わせ、一心にお参りをしました。

③ 与右衛門さんは、家の表戸の方に回つて、ガラリと開けました。

与右衛門「お母さん、与右衛門が帰つてまいりました。今、お父さんの墓参りをさせていただきました。」

母「まあ、与右衛門ですか。何と立派なお侍になって。よく、お参りに来てくれましたね。お父さんも



どんなにか喜んでおられることか。」お母さんは、与右衛門さんの両手をにぎり、涙を流して喜びました。

与右衛門「お母さん、お父さんが亡くなられてからは、さびしい暮らしをしておられることでしょう。ところで、妹の葉（よう）は、出

かけているのですか。」

母「ああ、葉は今、用事で出かけていますよ。そうそう、葉にめでたいことがあります。近々、隣村の小島家に嫁入りすることになりました。」

与右衛門「ほう、それはめでたいことだ。しかし、葉が嫁ぐことになると、いよいよお母さんは、ひとりぼっちになりますね。さびしくなりますよ。どうしたらいいものだろう。」

母「私のことは心配しなされるな。年はとりましたが、今のところは健康だし、葉は、嫁ぐとはいっても、近くの村なので何も心配はいりませんよ。」

お母さんは、笑いながら答えました。おひまをもらつて過ぎた小川村の数日間は、あつという間に過ぎました。与右衛門さんは、母と妹のことを気かけながら、小川村から大洲へと出発しました。

④ 大洲に戻つた与右衛門さんは、お母さんのことばかりが気にかかりました。

与右衛門「葉が嫁ぐと、お母さんはさびしいひとり暮らしになられる。病気になるっても、看病してくれる人もいない。どうすればいいのか。」

与右衛門さんは、よい方法はないものかと、毎日のように考えていました。すると、よい考えが浮かびま

した。

与右衛門「そうだ。この大洲は近江と違って、冬も暖かく暮らしやすい。お母さんに大洲に来てもらい、



一緒に暮らそう。そうすれば、私も安心だ。できるだけ早く、お母さんを迎えに行こう。」

与右衛門さんは、考えが決まると気分が落ち着き、お母さんを迎えに行く機会を待ちました。

⑤ 与右衛門さんが二十五歳になった時、ようやく殿様からおひまがもらえました。

与右衛門「ありがたい。小川村に行ける。早くお母さんを迎えに行かなくては。」



飛ぶような気持で、再びお母さんを迎えに小川村に帰つてきました。妹の葉が嫁いでから、お母さんはひとり暮らしで暮らしています。

与右衛門

「ずいぶん、屋敷が傷んでいるな。お母さんは苦勞をしておられる。心配していたとおりだ。」

ふるさとのわが家は、三年前より荒れて、ひとり暮らしの家だと分かる様子になっていました。表戸をガタガタと開けると、お母さんは粗末な昼ご飯を食べていました。暗い家の中に、急に明るい光が差しこんできたので、お母さんはおどろいて戸口を見つめました。

与右衛門「ただいま。お母さん、びっくりされたことでしょう。与右衛門です。」

母「まあ、与右衛門ですか。おどろきましたよ。さあ、お上がりなさい。」

思いがけず、息子が帰ってきたので、お母さんは大喜びです。

⑥ 与右衛門さんは部屋に入るやいなや、すぐに話を始めました。

与右衛門「お母さん、ようやくお迎えにまいりました。お墓参りに来た時から、早、三年も過ぎました。が、これからは、大洲でお母さんといっしょに暮らすことができるようになりますよ。」

